

5年を経過したウェスレー・メソジスト学会

坂本 誠

神の深い計画によって成立したウェスレー・メソジスト学会も5年を迎えることができた。この5年間、神の導きによって、学会誌が出され、研究会が積み重ねられてきたことは感謝に堪えない。創設当初より会長を務め同会の強固な土台づくりのために尽力された岩本助成氏に心より感謝する。同会は、新たに田添禧雄氏（日本基督教団姫路福音教会）を新会長に迎え更なる飛躍を目指す。

5年の間に、ウェスレー生誕300年を迎えることが出来、研究に拍車がかかった。特に昨年、今年と様々なウェスレー伝記が出版された。ウェスレー熱は、まだまだ冷めやらぬという状況に深い喜びを憶える者である。

最近では、ウェスレー神学や文献に関するデジタル化が進み、インターネット経由で、説教集（キングホーン氏が編纂した、標準説教集の現代英語ヴァージョン等のダウンロード可能）が販売されたことも進歩の一つである。さらに、最新の『ウェスレー著作集』（The Works of John Wesley Bicentennial Edition）のCDもアービンソン出版社から発売されている。このCDが便利なのは、研究者にとって単語検索が出来ることである。膨大なウェスレーの手紙、説教、日誌等から一語を見出すのは至難の業である。しかし、このCDを利用すれば、瞬時に検索、表示が可能なのである。今後、ウェスレー研究者にとって有効に活用されることであろう。

ウェスレー・メソジスト学会では、数々の恵みを受けた。特に、文献情報をいただき、自分の研究領域にアドバイスを受けて、必要な文献を交換し

合うこともある。これは学会員の幅広さにもよる。キリスト教主義の大学でメソジストの流れを汲む大学、大学教員、教会からも牧師・信徒を問わずに研究発表が為されている。これまでは、学会の雰囲気もよく、和気藹々とした雰囲気がある。この幅広さはウェスレー・メソジスト学会の財産であることには間違いない。

しかし、これで良いのだろうかと思われることもある。真剣な議論の過程において、更には突っ込んだ話し合いが為されることも今後は必要ではないだろうか。ウェスレー解釈には様々な立場がある。どの視点からウェスレーを読むかは、時には解釈の齟齬を生み出すであろう。その過程において更なる議論が積み重ねられ、ウェスレー理解が深められることが重要である。真摯な対話なしにはウェスレー研究の深化は存在しない。

もう一つ重要なのは、研究者の発見である。学会誌を見て、常に新しい執筆者が与えられ、学会が、多くの見解を吸収する場である必要がある。そのことにより互いに刺激を与え合うような学会が望ましい。その意味で、学会の知名度をさらにあげ、若い研究者に発表の場を作る努力は欠かせない。

今号では、ウェスレーと社会的な関係を中心に論文集が組まれた。特に、今回はウェスレーが「自然法」をどのように考えていたかという新しい視点の意欲作が、聖学院大学の加藤氏によって書かれた。これまでになく取り組みで今後の研究の深化が望まれる。今後も様々な分野からのウェスレー理解が望まれるので、まさにタイムリーな論文であると言える。さらに「メソジスト教会の社会事業」というテーマにそった論文が塩入氏によって書かれている。

ウェスレーの社会的関わりについては、すでに世界においても「貧しさ」「社会倫理」に関して、多くの論文、著作が書かれている。筆者も、ウェスレーが聖化を個人的聖化に限定するのではなく、社会的聖化に至るまで強調したことに関心があり、文献を調べてみたことがある。特にこの分野の研究はランニョンの研究によって始まったと言える¹。筆者にとっては、ウェスレーの聖化と言えば個人の実存のことと考えていたので、聖化概念の持つ幅広さに新鮮な驚

¹ Runyon, Theodore, *Sanctification and Liberation*, edited by Theodore Runyon, Nashville: Abingdon Press, 1981.

きを感じたものである。この本に接する以前にナザレン教団のテモテ・スミスによる、『リヴァイヴァルと社会改革』があった²。この著書に触れて、ウェスレーが起こした運動が、どのように社会改革につながっていったかが重要なのだということを認識することができた。この2冊を通して、筆者は、ウェスレー神学にのめりこんでいったのである。その後、ドイツの神学者マッカートによる『ウェスレーの社会的倫理』³やジェニングスによる『貧しい人々への良き知らせ』⁴をむさぼるように読んだことを覚えている。日本でも、ウェスレー・メソジストの立場からこの種の著書が記された。有名なものとしては、東方敬信、『神の国と経済倫理—キリストの生活世界をめざして—』（教文館、2001年）である。この著書を読んで、日本においてもこの種の研究が為されていることに深い感動を覚えた。ただ、この種の研究は日本においては、まだ始まったばかりであると言える。

日本において、やっとその先鞭をつけることが、今回の特集号で可能となったことは、喜ばしいことである。今後はさらに、社会的な関わりが個別テーマにおいても論文が発表されていくことを希望するものである。

ウェスレーは宗教を「孤独の宗教ではなく社会的な宗教である」と捉えた。特に後期ウェスレーの関心は、人間の実存的なものにとどまらず、現実社会状況、全被造物にまで及ぶ宇宙論・創造論的な視点が欠かせない。以上のことを考えると、この特集号は日本におけるウェスレーと社会との関わりを考察するスタートになったという価値を持つ。

私および馬淵彰氏が中井幸夫氏に加え新たに編集委員に選ばれた。読者の皆様には、是非ウェスレー・メソジスト学会に参加していただきたいと切に願う者である。また、支援と御加禱を賜りたいと思う。最後に今後もウェスレー・メソジスト学会が発展していくことを願いつつ筆を置くことにする。

(日本ナザレン教団小岩教会 牧師・日本ナザレン神学校 教授)

² Smith, L. Timothy, *Revivalism and Social Reform in Mid-Nineteenth-Century America*-, Abingdon Press, 1975.

³ Marquardt, Manfred, *John Wesley's Social Ethics— Praxis and Principles—*, Translated by John E. Stealy and W. Stephan Gunter, Nashville: Abigdon Press, 1992.

⁴ Jennings, W. Theodore, Jr., *Goodnews to the Poor—John Wesley's Evangelical Economic—*, Nashville: Abingdon Press, 1990.